

[理事が語る]

あれから1年

大曽根 匡

昨年5月に情報システム学会の理事に就任したときに、メルマガ編集委員長の川野喜一氏より「理事は語る」というタイトルで原稿を書くように依頼がありました。二つ返事でお引き受けしましたが、怠け者の私は1年以上も沈黙を続けてしまいました。最近、やんわりと原稿の督促が再びあったので、綾小路きみまろの「あれから40年」ではないですが、編集委員長に就任して「あれから1年」、そろそろ約束を果たすべく、1年間の雑感を書こうと思います。

私は、編集委員長に就任時の約束として、次の3点を掲げました（学会誌 Vol. 13、No. 1の巻頭言）。

(1) 学会誌のオープンアクセス化

オンラインジャーナルのもつ広い発信力や速報性の良さを発揮するために、学会誌をオープンアクセス化し、会員IDやパスワードを忘れていても、学会誌をストレスなく読めるようにしようという提案でした。論文が掲載された投稿者にとっても、すぐに周りの方に読んでもらうことができるので、大きなメリットになります。しかし、会費を支払っている学会員のメリットが損なわれるという理由で、学会執行部に相談しても、慎重論が大勢でした。打ち破るべき壁が厚いと感じました。

ところが、今年7月の評議員会で、オープンアクセス化を実現すべきだという意見が出され、それを追い風として再び学会執行部に働きかけたところ、今回は概ね理解を得られました。この件は、今年10月の理事会で議題として審議される予定となっています。

(2) 教育的査読制度の構築

論文査読により、学会誌の発刊以来の統計をとってみると、投稿論文数の約3分の2の論文が却下されているという本学会の現実から脱却するために、会員の魂の入った投稿論文をしっかりと受け止め、大切に扱い、磨いてあげるような教育的査読制度を構築したいという提案です。査読というよりも、むしろ良い論文に育てるという精神をもった査読制度を創りたいという個人的な思いです。

この思いを実現するために、今年7月から査読報告書のフォーマットを変えました。主な改訂のポイントは

- ① 編集委員長名で「教育的査読」の主旨を査読報告書に記述しました。そこでは、以下の3点を査読委員にお願いするようにしました。

- 教育的査読の観点から、第1回目の査読においては、極力「不採録」の判定をせず、論文をよりよくするための教育的な指摘をしていただくようお願いいたします。少しでもオリジナリティがあったり、会員にとって有益な情報があったりすれば、そのところを伸ばすような指摘をしていただくようお願いいたします。

- 「条件付き採録」の場合、「採録条件」と「よりよくするためのコメント」と「感想」を区別して記述していただくようお願いいたします。
 - 「採録条件」では、客観的に判断できる基準を明確に書くようお願いいたします。「より具体的に」とか、「もう少し丁寧に」という表現はなるべく避けてください。そのような表現の場合、少しでも具体的に、あるいは、丁寧になっていれば、採録条件が満足してしまうからです。
 - 二重投稿でないかどうかの調査をお願いいたします。
- ② 査読報告書の様式を 1 回目用と改訂稿用の 2 種類に分け、査読報告書の内容を、
- 採録条件、
 - 論文をよりよくするためのコメント、
 - 感想
- の 3 つに明確に分けました。
- ③ 査読委員としての留意点を記述し、その中で、特に採録条件については、客観的に条件が満たされたかどうかわかる明確な基準を記述するよう要請しました。

これらの改訂によって、投稿論文と採録数が増えることを期待しているところです。なお、過去 5 年間の採録論文数と投稿論文数は下記のとおりです。

表 1 採録論文数

学会誌	10-1	10-2	11-1	11-2	12-1	12-2	13-1	13-2	14-1
採録数	2	1	3	0	0	3	1	3	3

表 2 投稿論文数と採録数

年度	2014	2015	2016	2017	2018
投稿数	5	3	7	7	4+ α
採録数	1	2	5	4+ α	

(3) 査読期間の短縮化

査読プロセスを見直して、2 か月以内に必ず査読結果を提示できるようにしたいという公約です。「本学会は投稿論文の査読が速い」という噂が広がれば、学会員の増員にも繋がるかと思えます。

これを実現するために、メタ査読制度を導入しました。この方式では、2 名の査読者の意見が割れた場合、従来査読方式では第 3 査読者を立て査読をお願いしていたのですが、新方式では担当編集委員がすぐに判定するので、査読期間の短縮が期待されます。

編集委員長を引き継いでからの投稿論文について査読期間を計測したところ、初回の査読結果が返ってくるまでの平均査読期間は約 2 か月（最長は 5 か月）、最終的な結果が返っ

てくるまでの査読期間（改訂版の再投稿期間も含む）の平均は約4か月（最長5.5か月）でした。メタ査読方式に変えてからのデータはまだないので、新方式によって短縮化が図れたかどうかは何とも言えないですが、平均査読期間を計測・公表し、それを編集委員会の評価指標のひとつとしたいと考えています。

一方、編集委員会では早くもメタ査読方式について疑問視する意見も出されています。メタ査読方式により必要な査読委員数が増え、特定の査読委員の負荷が過重になり、査読の質が確保できなくなっている可能性があるという指摘です。また、投稿者からも、査読条件について意見を出されたり、見解を求められたりしています。編集委員会では、このような多様な意見・要望をきちんと受け止め、査読方式を改善していくようにしたいと思っております。

その他にも、学会誌の表紙を変えたり、特集号を企画したり、学会誌のコンテンツも会員にとって魅力あるものにしようと考えています。会員の皆様も、論文や記事を通して、会員相互の議論の場として、学会誌を利用していただければと思います。ただ、想像以上に編集委員長としてやらねばならないことが多いことがわかり、1年間を過ぎて、最近では疲弊してきております。これまで涼しそうな感じで何年間も編集委員長をされておられた石井信明前編集委員長には本当に驚かされるばかりです。

最後に、不慣れで頼りない編集委員長を懸命に支えていただいている編集委員の皆様と事務局の皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。